

相楽木綿の歴史

相楽木綿は、明治初期から昭和10年代にかけて、京都府南部の相楽村（現木津川市相楽）を中心に生産されてきました。

この地域は江戸時代から綿作が盛んで、自給的機織りも行われていました。また隣接する奈良の特産品である高級麻織物「奈良晒^{ならさらし}」の生産地でもありました。

明治時代になり、「相楽木綿」と呼ばれた木綿を織り始めるようになりました。

相楽木綿は地元の南山城をはじめ、奈良、京都、滋賀、大阪などに流通し庶民の布として愛用されていました。

相楽木綿の特徴

相楽木綿は、藍染の紺地に色系の縞と緋が織り込まれた美しい木綿織物です。

縞と縞の間に緋が使われていたり、「たっちよこがすり」と呼ばれていた色系縞と経緯緋^{たっちよこがすり}の組み合わせや、緯緋で文様を作り出す「工夫緋^{くふうがすり}」など緋と色系の多様使いが特徴です。

また、風合いの良い布が織れるといわれる「大和機」や、その改良機である「チョンコ機」で織られた味わいのある手織り木綿です。



相楽木綿経緯緋裂

● ご案内 ●

南山城地方に伝わる綿文化、綿の栽培から綿練り、綿打ち、糸紡ぎ、機織りをして布ができるまでの一連の活動を体感することができます。

相楽木綿、機道具、綿畑の見学

綿練り、綿打ち無料体験

機織り体験教室、糸紡ぎ教室（予約制、有料）

（詳しくはスタッフにお尋ねください。）

相楽木綿ができるまで

あすり くく

紺括り

紺は、織る前に柄に応じて染め分けた糸(紺糸)を作り、紺糸によって文様をあらわす技法です。



経紺括り

紺の部分だけ別に白糸のまま整経して、計算にしたがって紺くくりをします。



緯紺括り

紺くくり枠で行います。枠の周囲が織り巾の一往復になっています。

あい

ぞめ

藍染

紺屋さんに正藍染に出します。



せい

けい

整経



機にかけるのに必要な経糸の長さとお本数を唾を取りながらそろえます。



ちきり巻き



整経した経糸を粗箆あらおさに通して、ちきりに巻き取ります。



もじり通し



おすの順番通りに経糸を一本ずつもじり(糸総統いとそうどう)に通します。経紺糸もこの時、柄の順番に入れ、一結にします。



あき

とれ

箆通し

織り巾を保ち、緯糸を打ち込む箆あきに上糸、下糸を二本一組にして通します。



はた

お

機織り



おす枠で緯糸を入れ織り始めます。経糸と緯糸の交差の繰返しで布が織り上がります。



和綿の花



和綿



相楽木綿の紺括りを承継していたただ一人の伝承者から当時の技法を習いました。一本の糸でつなげて括り、解いて再利用ができます。